▼シリーズ「CNCP 設立 10 周年を迎えて」

CNCP 設立につながる土木学会の活動

土木学会/成熟したシビルエンジニア活性化小委員会
駒田 智久

シビル NPO 連携プラットフォーム（CNCP）が土木学会 100 周年記念事業の一つとして発足したのは 2014 年（平成 26 年）ですが、その 7 年前、2007 年にスタートした土木学会の「成熟したシビルエンジニア活性化小委員会」が源流にあります。親委員会の教育企画・人材育成委員会は、学校教育や社会人になってからの生涯教育の充実を通じて土木界の人材育成を図ることを目的としていましたが、一線を退いた（リタイア～退役）後の土木技術者についても対象に加えることで、上記小委員会（略称、成熟シビル小委）が発足しました。

この小委員会は現在に至るまで活発な活動を繰り広げていますが、当初の段階での課題は

a. 人材結合システムのあり方（求職側と求人側のマッチングシステム）
b. 新しい公共及びソーシャルビジネス
c. 建設系 NPO の現状と中間支援組織の必要性
d. 我が国と成熟したシビルエンジニアの活性化推進

の 4 つでした。

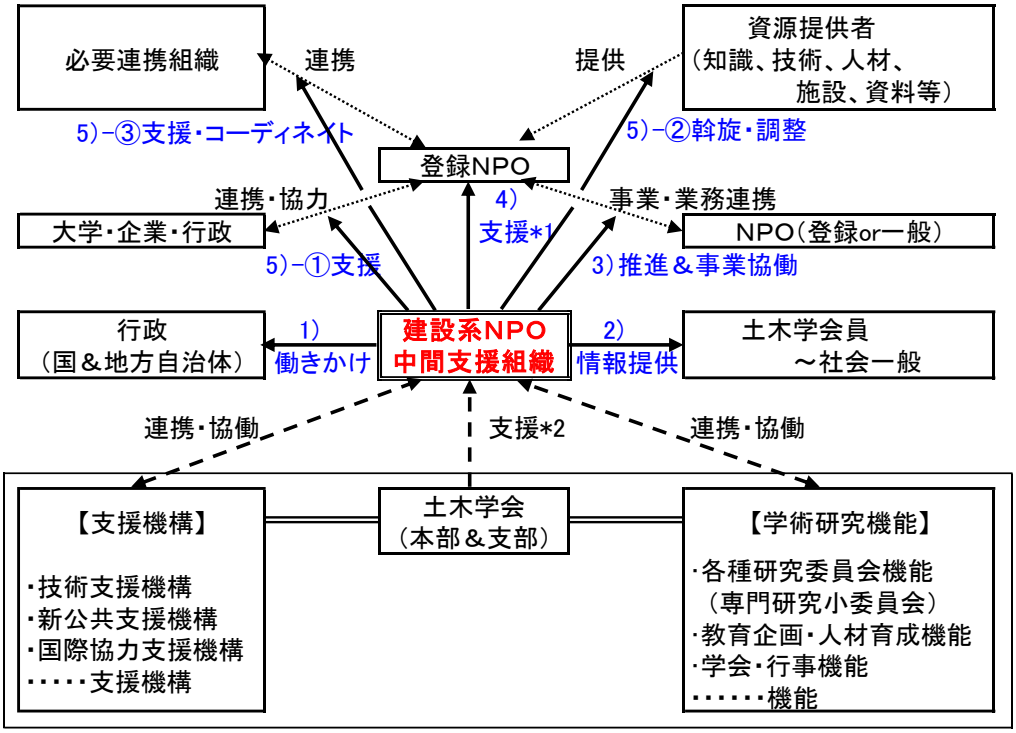
上記土木学会記念事業として採択された事業のタイトルは「『新しい公共』の担い手となる建設系 NPO を支援する『中間支援組織』の設立」で、直接的には上記課題の「c」を対象としていますが、「b」についても意識するものとなっています。

1995 年（平成 7 年）は阪神大震災時のボランティア活動を受けて「ボランティア元年」とされ、その延長線上で特定非営利活動推進法（いわゆる NPO 法）が成立したのは 1998 年でした。土木の世界では必ずしも活発な活動や着目がなされていたわけではなく、ようやく土木学会誌で「NPO と土木の接点」として取り上げられたのが 2001 年 6 月でしたが、これを正面から意識した委員会としての課題設定が「c」です。また、その時点で社会的には、それまで各種の行政サービスは官が担うとしていた考えから、様々な形で民が担う「新しい公共」が取り上げられつつあったことを意識したのが「b」です。

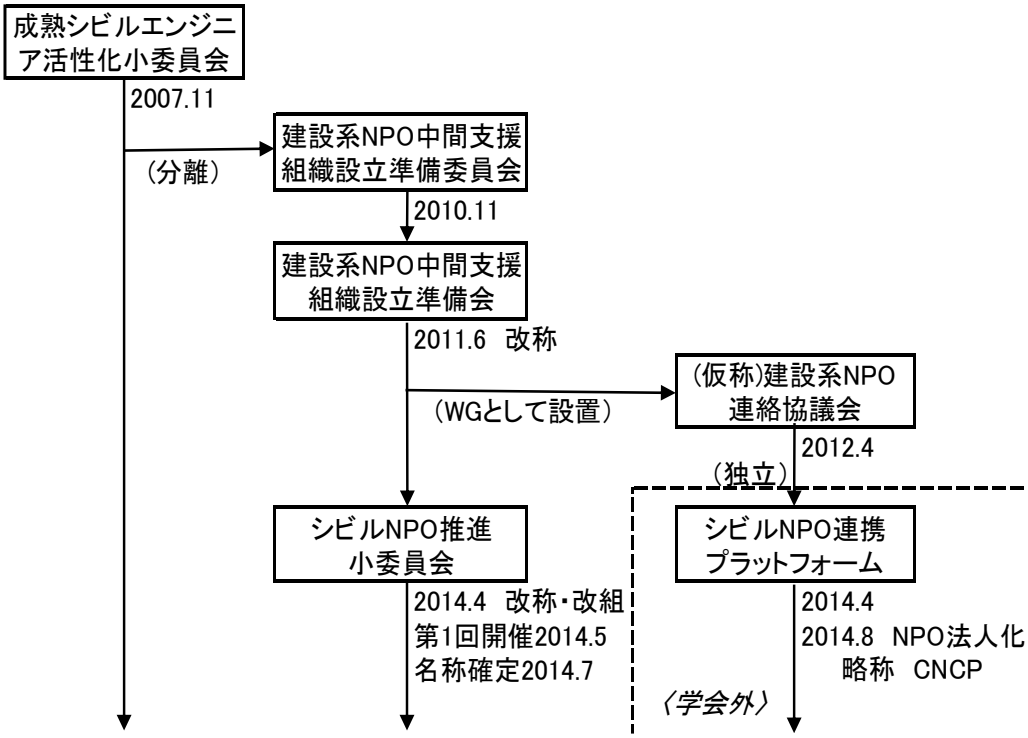
成熟シビル小委は、これらに係る調査研究を踏まえて、個々の NPO 団体の活動の一層の展開は重要であるものの、そのためにも、それぞれの団体の「連携」の重要性と、それを推進する「組織」の必要性を認識し、土木学会主導による建設系 NPO 中間支援組織の立上げを主内容とする「提言」を 2010 年 11 月の学会理事会に提出するに至りました。

その時点で想定していた中間支援組織の機能・役割面から見たイメージは図－1 に示すようなものです。すなわち、土木学会の後ろ盾を背景に、NPO のみならず産官学民のあらゆる関係先に様々な働きかけを考えるものでした。

提言と同じ時期に、中間支援組織設立に向けての準備組織を立ち上げましたが、2014 年 4 月の CNCP の発足に至る経緯は図－2 に示す通りです。この組織は、本来あるべき姿として土木学会の外に設立されたものですが、同図に示すように学会内で CNCP と連携して推進する組織として「シビル NPO 推進小委員会」が設けられています。この小委は土木学会 100 周年記念出版として「インフラ・まちづくりとシビル NPO（右）」を同年 11 月に刊行しています。



図－1　建設系 NPO 中間支援組織と他の組織等との関係



図－2　成熟シビル活性化小委～シビル NPO 推進小委／CNCP

この本は土木分野の非営利活動に関して、その意味や状況、更には将来展望の全般を、産学民（NPO 含む)の 12 名の著者による執筆や、別途 5 名の方による座談会によってカバーした全 270 頁超のもので、この分野の活動のその後の展開に向けての多くの情報を提供すると共に、小なりと雖もその時点の

ハンドブック的なものであったと位置づけできるかと思います。この本がこれまで、この分野において果たした役割はよくは承知していませんが、現時点においても一定の役割を果たすことができるのではないかと考えています。

この本の取り纏めに当たっては、今は亡き内藤堅一さんを含む全 5 名の編集委員会を立上げました。委員の一人が保有する外房の別宅で泊りがけの合宿編集員会を開きましたが、委員会後のお酒を伴う懇親・懇談は良き想い出として残っています。

なお、CNCP の設立は 2015 年の土木学会誌「特集 土木学会 100 周年記念　ー豊かな暮らしの礎をこれまでも、これからもー」（Vol.100 No.5）の「社会貢献」の分野で紹介されています。以降の展開は関係者の皆様の考えと努力によるものですが、社会情勢の変化も見据えながら、さらなる進展が期待されます。

●付記）自身が土木学会におけるこの関係の活動から退いたのは相当の昔になります。今は僅かに母体となった「成熟したシビルエンジニア活性化小委員会」の末席に名を連ねるだけです。替って活動しているのは地域の水の関係です。

住いしている東久留米市は、東京都で唯一「平成の名水百選」に選ばれた「落合川と南沢湧水群」を抱えて、「湧水・清流保全都市宣言」も発出しています。水に係る市民運動も活発で、多くの市民団体が活動しています。自身はそのうちの２つの団体（過去には３団体）に係わっています。一つは「東久留米の井戸水位を調べる会」、もう一つは「東久留米・黒目川流域 水の会」です。

市内の市民団体で NPO 認証を取得しているのは１団体のみで、我々も含めて他の何れの団体も、法人認証は取得していません。取得とその維持に係る負担と得られるメリットとの関係で、殆どの団体は取得に動いていないようです。ある面、認証を受けていない気安さがこの種の活動に似合っているのではないかの想いも否定できないところです。

上記の我々の団体は市内の井戸の水位を調べたり、水に係る自然挙動の調査研究も志していますので、シビルに係る活動と位置づけされないわけではありませんが、余りそのことに留意している訳ではありません。他に同様の「緩い」活動をしている市民団体も多いと思います。余り肩ひじ張らないこのような活動は、情報交換はともかく、特に連帯しての活動を意識していないと思いますが、その総体は行政もさりながら、学術的な着目の対象にはなるかもしれません。